

増殖していきます。そしてこうした自己増殖は、自分の感情の網目を読み解く力が本人自身に備わらない限り、どこまでも果てしなく続くでしょう。ひとはこうして、本来、自身が生み出したものであるはずの感情に訳も分らず流され、感情のままに行動する自動人形となるのです。

これが最初に紹介した「とらわれた状態」あるいは「受け身の状態」です。スピノザは『エチカ』後半部で、どうすればこうした状態から可能な限り脱却し、人間として可能な限り自由に生きていくことができるかという、自由になるための道のりを提示しようとしています。だれもがそういう道を実際に歩むかどうかは別として、とにかく理論的には、だれもが歩むことのできる道のりを示そうとするのです。

こういう観点からすると、スピノザがやろうとしていることは、一七世紀に続く一八世紀に大きく開花することになる、いわゆる啓蒙思想を先取りしているようにも思えてきます。スピノザが亡くなってから一〇〇年と少しの後、一八世紀を代表する哲学者の一人であるカント (Immanuel Kant、一七二四—一八〇四) は「啓蒙とは、ひとが自分のせいでそうなっている未熟な状態から脱却することである」という有名な定義を行っています (カント一九七四)、この「自分のせいでそうなっている未熟な状態 *selbstverschuldete Unmündigkeit*」を「とらわれた状態」「受け身の状態」といったスピノザ的用語法に置き

かえれば、『エチカ』と啓蒙思想の間には相当程度の親和性があると思われます。

ただし、こうした親和性を手放しで認めるわけにもいかないでしょう。啓蒙思想は、少なくともその最大公約数的な形では、理性に対する信頼をかなり楽天的に押し出してくる傾向にあります (そしてだからこそ、二度の世界大戦の惨禍を経験した二〇世紀後半になって、激しい批判にさらされることになるのです) が、スピノザは決してそういう論調を取らないからです。繰り返しになりますが、そもそもスピノザは理性を人間の初期装備とみなしていませんし、適切な訓練を受ければだれでも身に付けられるような能力とも考えていません (とらうか、次回お話しするように、スピノザのいう理性は普通の意味の「能力」ではありません)。したがってスピノザは、一人一人の人間が、ひいては人類全体が「啓蒙」によって野蛮な状態から徐々に抜け出して文明化を遂げていくといった、直線的な進歩史観に立つことも原理的にできないのです。

もしスピノザの哲学に何らかの啓蒙思想的側面を読み取ろうとするなら、そこである「啓蒙」は、これまでの思想史研究で本流として取り上げられてきた啓蒙思想とは別の何かとして理解しなければならぬでしょう。たとえばイスラエルの哲学者ヨベル (Urmivahu Yovel、一九三五—二〇一八) は、西洋近代哲学の底を地下水脈のように流れる「暗^S啓蒙 *dark enlightenment*」の系譜を、まさにスピノザを起点に描き出そうとしました

(ヨベル一九九八)。ヨベルのいう暗い啓蒙とは、知らせても必ずしも相手に喜ばれないような都合の悪い真実を、逆恨みや迫害をもつとせざるに暴き出し、直視しようとする、いわば「空気を読まなす」啓蒙です。

また、イギリスの思想史家イスラエル Jonathan Israel が啓蒙思想の流れを「過激な啓蒙 radical enlightenment」と「穏健な啓蒙 moderate enlightenment」の二つに大別しようとするのも、基本的にはこれと同根の発想に基づいていると考えてよいでしょう (Israel 2001)。従来啓蒙思想の本流とみなされてきた「穏健な啓蒙」の思想家たちは、状況によっては既存の宗教・政治勢力との妥協をいとわないう不徹底さを抱えていた、とイスラエルは指摘します。これに対し、そういう妥協を徹底して拒んだ思想家たちは、その徹底性のゆえに激しい拒絶や迫害にさらされ、いわば地下活動的に思索や著述を重ねることを余儀なくされました。彼らこそイスラエルが掘り起こし、啓蒙思想の真の本流としての「過激な啓蒙」の系譜に分類しようとする人たちであり、そしてその淵源とされるのはやはりスピノザなのです。

イスラエルの「過激／穏健」という二分法的な論調に対しては、分類基準が不明瞭で恣意的だとか(たとえばヒュームのように大胆かつ徹底した懐疑思想の持ち主でも、政治的に穏健な人物なら「穏健な啓蒙」の陣営に分類されてしまう)、そもそも一七〜一八世紀時点でのスピノザの影響力を過大評価しているとか(これはある意味もつともな指摘です)、同じ思想史の研究者たちからさまざまな批判が提出されています (Israel/Mulrow 2014)。しかしいざれにしても、たとえば同時代の「啓蒙専制君主」を気取る独裁者たちと気持ち悪いくらい仲良くできるヴォルテールや、社会契約説の理論構成のあちこちで聖書の神に頼ろうとするロックのような、どこか妥協的で中途半端な印象を受ける人たちに「代表」されがちだった従来の啓蒙思想理解が、抜本的な見直しを迫られているのは確かでしょう。そうした深刻な問題意識に貫かれたイスラエルの目には、スピノザという一七世紀の札付きの異端者が、やはりどこか特別な輝きを放って映っていたと思われれます。理性が言うほど当てにできないことは百も承知で、それでも理性に突破口を求めしかない。人間が置かれているこうした状況の、いわば逃げ場のなさを、希望も絶望も差し挟むことなく、ただひたすらにそういうものとして理解しようとしていた一七世紀人は、スピノザの他に恐らくいなかったからです。

スピノザ

人間の自由の哲学

吉田量彦



講談社現代新書

2652

吉田豊彦(よしたかずひこ)

一九七二年茨城県水戸市生まれ。慶應義塾大学文学部、同大学院文学研究科を経て、ドイツ・ハンブルク大学にて学位取得(哲学博士)。現在、東京国際大学商学部教授。専門は、「十七・十八世紀の西洋近代哲学。著書に『理性と感情——スピノザの政治哲学』(下)

「ソビエト」管理作家の「モダン」思想、慶應義塾大学出版会「ゾラ」訳書「スピノザ」哲学・政治

目次

はじめに	6
第一回 なぜオランダで生まれたか——スピノザの生涯(一)	14
第二回 破門にまつわるエトセトラ——スピノザの生涯(二)	39
第三回 町から町へ——スピノザの生涯(三)	73
第四回 どんな著作を遺したか——スピノザの思想(一)	99
第五回 なぜ『神学・政治論』を書いたのか——スピノザの生涯(四)	129
第六回 なぜ「哲学する自由」が大切なのか——スピノザの思想(二)	154

第七回	聖書はどんな本なのか——スピノザの思想(三)	172
第八回	自由は国を滅ぼすか——スピノザの思想(四)	196
第九回	激動のオランダと『エチカ』の行方——スピノザの生涯(五)	221
第一〇回	神はわたしの何なのか、わたしは神の何なのか——スピノザの思想(五)	243
第一一回	ひとはどういふ生き物か——スピノザの思想(六)	267
第一二回	ひとはどうして感情にとられるのか——スピノザの思想(七)	293
第一三回	ひとは自由になれるのか——スピノザの思想(八)	314
第一四回	彼は自説を変えたのか——スピノザの生涯(六)と思想(九)	339
第一五回	「死んだ犬」はよみがえる——その後のスピノザ	363
おわりに		391
おわりのおわりに		396
謝辞		400
引用・参考文献		403